

韓国少女漫画『森の名前』（金辰）に おける人と記憶

佐 島 顕 子

はじめに

韓国で純情漫画と総称される少女漫画の歴史は、朝鮮戦争復興期の1950年代、家庭漫画の領域から、特に家庭における少女の純情を扱った漫画が分化したことに始まる。1960年代の「漢江の奇跡」と呼ばれる高度成長期を背景に、少女漫画作家第一世代による最初の黄金期を迎えるが、軍事政権による厳しい検閲と貸本出版社の市場寡占によって自由な創作が阻まれると少女漫画はその魅力を失い、読者離れを招いて衰退する。読者が漫画の面白さを再認識して漫画に戻ってくるのは、1979年に日本の作品『キャンディ・キャンディ』アニメーションがTV放送されたことによる。『キャンディ・キャンディ』をきっかけに韓国に大量に流入した70年代日本少女漫画は、折しも、少女漫画で扱えない素材はないと信じて少女漫画の地平を広げた24年組と呼ばれる新進漫画家たちの作品が中心であった。それらの作品は韓国においても、善良なヒロインと画一的な勧善懲悪的なストーリーというマンネリズムを打破した。漫画市場は日本の作品に席卷されたが、その読者たちの中から、新しい才能を持つ韓国の作家も続々とデビューした。1960年代前半生まれのファンミナ、キムジンキムジン、シンイルスクシンイルスク、キムヘリンキムヘリン、カンギョンオクカンギョンオク、黄美那、金辰、申一淑、金恵璘、姜敬玉などであり、彼女たち「少女漫画第二世代」が中心となって1980年代の少女漫画復興期を形成した¹⁾。

その第二世代作家の一人、キムジンキムジンは、スクリーントーンを多用した独特な画

面構成とともに、その人間洞察の深さでも高い評価を得ている。星間戦争を背景とした『ブルーフェニックス・シリーズ』の外伝として描かれた短編『荒蕪地 (황무지)』²⁾は、その画面処理の美しさと共に、戦場における人間疎外を扱った内容から、1996年度東アジア漫画原画展 (日本) で大賞を受賞した。

本稿では、金辰の代表作のひとつ『森の名前』を中心にとりあげ、その人間観と歴史意識を検討し、隣国の少女漫画が描く世界を考えたい。

1 金辰と作品について

金辰は1960年ソウルに生まれた。現在の作品性を支える文学的素養は、少女時代につちかわれたもので、高校時代に投稿していたのは漫画ではなく文学分野だった³⁾。漫画を本格的に描き始めたのは大学進学後で、漫画家キム・ヒョンベ⁴⁾に認められて1983年雑誌「女高時代」に『海に去った鳥 (바다로 간 새)』を連載、デビューする。

彼女の作風はコメディタッチのファミリー物(『レモネードのように (레모네이드처럼)』、『モカコーヒーを飲むこと (모카커피마시기)』等) からシリアス作品まで幅が広く、スクリーントーンを多用した絵柄は洗練されている一方、可愛らしさを表現した場合は非常に可愛らしい絵を描ける。にもかかわらず、シリアス系列の作品内容は非常に暗い色調を帯びることが多い。

彼女のシリアス系作品として、初期の代表作『1815…』⁵⁾、中期の代表作『黄昏に散る (황혼에 지다)』⁶⁾、『森の名前 (숲의 이름)』⁷⁾、現在も執筆中の『風の国 (바람의 나라)』⁸⁾があげられるが、ともに登場人物の恋愛関係に主題を置かない。

『1815…』[図版1] はナポレオン戦争期に敵前逃亡の罪で戦場で射殺された若い少尉の、遺族の物語である。軍人貴族フォン・ラインハルト家の家族それぞれが、愛する長男の死、それも不名誉で不可解な死を受け入れられず傷つく姿が描かれる。普通の少女漫画ならば、彼にも逃亡するだけの事情があったことが語られるものだが、作者はあえて一切の説明を避け、読者を突



【図版1】『1815...』 ©デウォン

き放す。人間の行動や死の理由を他者は完全に知ることはできないということが、この作品のテーマだからである。主人公で、明るく人当たりのよい士官学校生徒サビン（次男）は、兄のように家族を悲しませることを恐れ、自分の感情をおし殺して義務に忠実な生き方を選び続けた結果、ワーテルローの戦場で「逃げず」に戦死する。やはり軍人として戦場にいた父親は、かつて長男がなぜ逃亡したのかも、次男が何のために責務を果たしたのかも知る

すべがなく、ただ痛哭するしかない。命を賭して家族を愛したとしても、相手はその心情を知りえないという、人間関係における普遍的な悲しみを描き出した作品である。

作品の進行は、日常生活や学校生活にふとのぞく死んだ兄への悲しみや怒り、家族間の思いやりや誤解が丹念に拾われるが、ラインハルト家に特に大きな事件が起きるわけではなく、それ自体は退屈かもしれない。時代設定にリアリティを与えるには十分すぎる分量の、ペルシャ戦争や三十年戦争を扱った士官学校の戦史講義や口頭試問、プロイセン参謀部と軍制改革、ブリュッヒャー・シャルンホルスト・グナイゼナウなどの名が頻出する時局についての議論のシーンも、登場人物らに直接的な影響を与えるわけではない。唯一少女漫画らしい恋愛エピソードも、主人公サビンの恋ではなく、彼の級友と居酒屋の三女ダニエラとの恋である（サビンは二度見かけたダニエラの姉ヘスターに惹かれるが、恋を自覚することも話しかけることもなく終わる）。

にもかかわらず、最後の58ページにわたる迫力ある戦場シーンに、それまでの千ページ余のすべてが収斂されるという作者の作品構成力は注目される。サビンが息をひきとる瞬間に、「一度ぐらい彼女（ヘスター）にこんにちはと試してみたかった」とひとこと本心を表現するシーンは、父親のみならず読者までも、サビンは模範的な軍人の道を自然体で歩いていると錯覚していたことを思い知らせる演出で、他者の心情を知ることの難しさを読者につきつける効果を持つ。

『1815…』は1987年発表当時、夢見るようなラブストーリーを扱わない少女漫画が存在することを読者に認識させた作品であったという⁹⁾。10代を主対象とする少女漫画が扱う主題のひとつは「成長」である。少女漫画の中の恋愛は、大人の愛憎劇の描写とは違い、登場人物の成長を助ける副次的な素材にすぎない場合も多い。したがって、我が子を失った傷が癒えない両親や、悲しみにくれる両親から結果として放置される子どもたちが、それぞれに相手を思いやって立ち直ろうと努力するものの果たせないという設定のもと、両親から愛されたい、両親と幼い弟を失望させたくないという心理から、「良

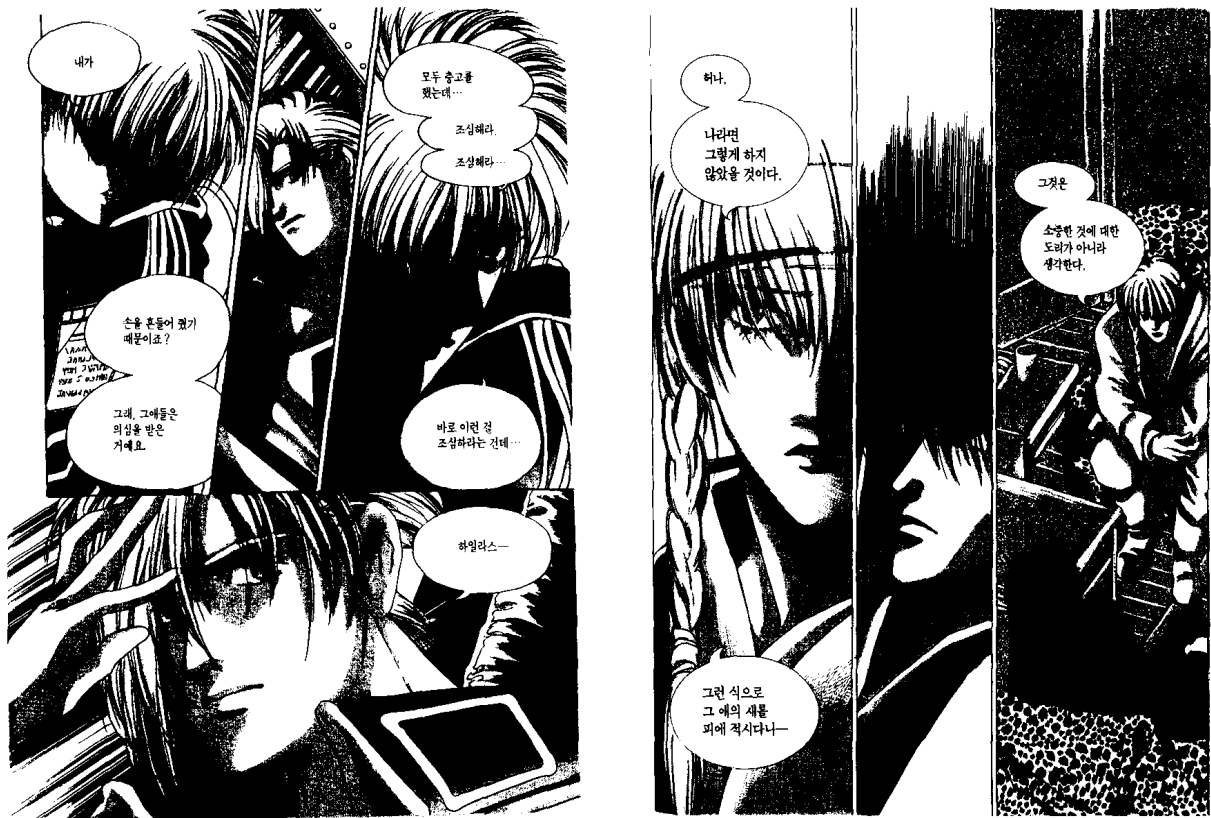
い子」の規範を受け入れて成長しようとする思春期の姿を描いた『1815…』は、非常に「少女漫画」的な作品である。

そして居酒屋の三姉妹のサイドストーリーでは、「罪意識」が扱われる。美人だが浅薄な三女ダニエラは、彼女が本気ではないにしろ投げつけた冷たい言葉によって長女が自殺した時、自分のせいじゃない、と現実から目をそらす。優しくおとなしげな次女のヘスターは、自分の内面に、長女の失恋と不幸を喜ぶ嫉妬心があったことを認め、一生を罪意識の中で送ろうとする。ヘスターとダニエラがその後どういう人生を送ったのかは不明だが（本来『1815…』は [The Songs 1813-1994] というシリーズの最初の部分として構想されたため、次作に引き継がれるべきエピソードは未完のままになっている）、「罪意識」の問題は後日の作品『森の名前』で深化して追求される。

『黄昏に散る』は現代韓国を舞台としたもので、ドメスティックバイオレンスや受験戦争の重圧にさらされながら、そういう家庭や社会にすりより適応しなければ生きていけない「良い子」の内面の空虚さと保身主義、一方でその家庭や社会を捨てた場合の行き場のなさや閉塞感を仮借なく表現した中編である。

『風の国』は現在も執筆中で、紀元1世紀の高句麗を舞台にした歴史ファンタジーである。『三国史記』に登場する瑠璃明王と大武神王の父子間の複雑な愛憎関係、そして次代の大武神王と息子・好童王子との間で反復される愛憎関係が描かれる。好童王子と楽浪の姫との「自鳴鼓」伝説¹⁰⁾も、ラブストーリーというよりも父子関係によって苦しむ物語となる。

金辰と同世代の作家・黄美那や金恵璘の作品が、厳しい現実の中でも人間が持ちうる心の強さ・美しさを描いているとすれば、金辰は人の心の弱さ・狡猾さ・愚かしさに焦点をあてて人間の本質を追究する。それは、作品ジャンルによって絵柄を描き分けず、古代高句麗も東洋画風に描かずあえてスタイリッシュなSF作品と同じ技法を用いる¹¹⁾ことにも現れている。時代や場所や状況が変わろうとも、人間は同じ人間でしかない、という執筆姿勢が窺われる。[図版2]



[図版 2] 『荒蕪地』(左) と 『風の国』(右) ©時空社

そのような金辰の作品は、「シュガーコミック」と総称される軽く楽しい大衆的な少女漫画群に比べると、読者を楽しませるのではなく「落ち着かなくさせる」といわれ¹²⁾、漫画に一過性の娯楽のみを求める読者は金辰の作品を避ける。しかし、漫画に作品性を求める読者は、金辰を強く支持している。

2 『森の名前』とは

『森の名前』は、1997年度韓国出版漫画著作賞を受賞した作品である。

この作品は、朝鮮王朝時代末期から植民地時代、朝鮮戦争、戦後復興期、そして現代に至る20世紀現代史に題材を取った作品である。彼女のほかのシリアス作品と同様、主人公の恋愛には重きが置かれない。

『風の国』など他作品と同様、ストーリー展開は「一貫した物語構造や展開方法を拒否し、登場人物らの多重的な配置を通し、瞬間瞬間に別の人物が

叙事の中心に立つ¹³⁾という特徴をもつ。すなわち、直線的かつ説明的なストーリーテリングではなく、様々な人物を中心とする断片的なエピソードを時間系列を前後しながら配置する特徴を持つ。それで、金辰作品は解説が難解だという声も多いが、「他人に見える姿と自分自身とは違う／人はたやすく他人を誤解する」という前提で作品を表現する時、そのような手法は非常に効果的である。

『森の名前』の内容を、作品進行通りにではなく、時系列的に整理すると以下のようになる。

ソウル北方の抱川郡ボチョンにある架空の村・鶏養里ケヤンニには、植民地時代に建てられた日本家屋と桜の古木がある。そこに埋められた秘密とは、植民地時代の生体解剖、朝鮮戦争中の金井窟事件を思わせる村人虐殺、戦後その地に置かれた孤児院の謎の火災と子供たちの焼死などである。作品の主要登場人物であるクォン・ノシクは、その事件すべてに関わり、欲望のままに奪い、殺し、ついには財閥会長にまでのしあがった。

主人公は、クォン・ノシクの孫でソウルに住む大学生のヨンヒである。人もうらやむ財閥の後継者だが、彼の生活は、クォン家に復讐しようとする人々によってつねに脅かされてきた。ヨンヒの両親は彼が小学生の頃に殺され、犯人は不明のままである。ヨンヒの兄ユンは十年ほど前から精神異常のふりをして、鶏養里の日本家屋に引きこもって暮らしている。そしてヨンヒの婚約者ウンジュも、交通事故を装って殺される。

「何も知らず、何もしていないのに、孫の世代が祖父の罪をかぶらなければならないのか？」と、ヨンヒは祖父母が隠しているクォン家の過去を知ろうと決意する。作品冒頭で、昔の事件の復讐のためにノシクを襲う老人（ソン・ジョンホ）が登場するが、その老人の刀が勢い余って、ノシクではなくかたわらにいたヨンヒに刺さるシーンは、この「孫の世代が祖父の身代わりにその罪科を支払うのか？」という問を象徴する重要なエピソードである。

ヨンヒは過去を知るために、祖父の故郷・鶏養里に戻っていく。

そこでヨンヒが知った事実は彼にとって衝撃的であった。1940年代、満州

の731部隊を思わせる部隊出身の日本人医師・宮本が鶏養里に病院を建て、そこで対日協力者ノシクとともに村人を捕らえて生体解剖を行っていた。その頃、桜の木の下ですべてを見ていたのは宮本の幼い娘ななみだった。日本が敗戦するや、ノシクは宮本を殺害して独立運動家を装った。1950年～53年の朝鮮戦争でノシクは戦況に応じて北朝鮮側と韓国側を行き来し、鶏養里の村人を虐殺し、大量の死体を井戸に投げ込んだ。宮本の遺児ななみは日本に引き揚げ損ない、東豆川^{トンスチョン}で駐韓米兵相手の娼婦となってユンを産む。その後、ノシクが生体解剖の秘密を守るためにななみを探し出し、息子の嫁として引き取る。ヨンヒの母親がそのななみである。

植民地下の日本人医師による生体実験・殺害、また朝鮮戦争時の市民虐殺は、それぞれ実際に起きた事件である。

中国における731部隊の生体実験、九州大学医学部でおきた連合軍捕虜生体解剖事件は有名だが、韓国においても類似の事例が存在する。朝鮮総督府は全羅南道の小鹿島・更正園（1917年設立）にハンセン病患者を強制収容し、患者たちは神社参拝や強制労働を強いられ、虐待・殺害された。それだけにとどまらず、日本人医師が患者たちに痙攣注射を打って死亡せしめ、その後解剖したという生存者の証言がある¹⁴⁾。

朝鮮戦争中の金井窟事件とは、1950年9月、北朝鮮軍に占領されていたソウル北方の高陽市^{コヤン}一帯が韓国軍に奪還された時、警察と治安隊・右翼団体が一ヶ月をかけて「占領中に北朝鮮に協力した裏切り者」を摘発し、一山付^{イルサン}近の金の廃坑（金井窟）で虐殺、遺体を廃坑に投棄した事件である。だが本当の北朝鮮協力者は北朝鮮軍とともにすでに逃れており、犠牲者は、実際には北朝鮮支持者ではない場合がほとんどだった¹⁵⁾。1995年に第一次発掘調査が行われたが、犠牲者は未成年者を含む最小400名から2000名と推測される。類似の事件は各地で起きており¹⁶⁾、現在、真相の掘り起こしが進められている。

すなわち、クォン・ノシクと宮本は、それぞれ現代史の暗部を象徴する人物として設定されているのである。主人公ヨンヒは当初、亡き母親が日本人



[図版 3] 『森の名前』 ©大元文化出版社

だったこと以外は、何も知らなかった。しかし、母方の祖父は生体解剖を行った日本人医師、父方の祖父は対日協力者の上、同じ村の人々を虐殺した人物だったことを知るに至る。たしかにヨンヒは「何も知らず、何もしていない」。しかし、彼の豊かな生活と安定した将来は、二人の祖父の蛮行の上に成り立っているのである。

3 桜が象徴するもの

この作品は、ストーリー上は陰惨な事件が次々と現れるにもかかわらず、画面上の基本イメージは、全編を通して描かれる、満開の桜と散りゆく花びらの美しさである [図版 3]。この対比は、梶井基次郎『桜の樹の下には』¹⁷⁾の有名なフレーズ「桜の樹の下には屍体が埋まっている」を効果的に利用し

たものである。

韓国において桜は日本を連想させる花である。したがって、作品中、日本人の宮本ななみ、その意志を継いだ息子ユンが、このフレーズのヴァリエーションを繰り返し語る。

「桜の木の下にはいつも屍体が埋まっている。あばいてはならない秘密を抱いて、少しずつ少しずつ粉々になって、ついには白い骨しか残らない。そうして秘密はひそやかに消えていく。桜の花がはらはら散ると魂たちもはらはら散るんだ。いつか誰かが根元を掘っても何もなくなっている時まで…」(ななみ。2巻 p194) [図版4]

「雨が降ると墓いっぱい水があふれる。墓いっぱい水があふれば棺の中にも水があふれる。棺の中に水が入ると死体が水に浸ってぷかぷか浮かんでくる。腐りもせず、どす黒くぶよぶよとふくれて墓をいっぱい満たし、その隙間のあちこちから(桜の)木の根が這い込み、屍体のそこここからみつきのたうち回る」(ユン。1巻 p209)

この「屍体」とは、直接的には、生体解剖、虐殺、焼死した子供たちの死体を指すように、ストーリーが展開していく¹⁸⁾。桜の木は、死の秘密を養分に花を咲かせ、散り、やがて秘密自体が忘れられて消えていく。その時まで過去の秘密をあばかず、守るのが桜の木の番人—ななみとユン—の役割である。

その虐殺/死の秘密を知りながら、ななみ同様に黙し続けてきたユンは、繰り返し人々に問いかける。「桜の下に埋められているのは、クォン・ノシクの罪だけか? 本当にそう思うのか?」と。

ユンの幼なじみで元恋人のナヒは、彼が精神異常を装っている今も彼を愛している。彼らの子ども時代、ユンが世間から「日本人の洋公主バンバンが産んだ混



[図版 4] 『森の名前』 ©大元文化出版社

血兒」と二重三重に差別されていた時、ナヒはユンのただひとりの友だちだった。彼らが成長した後、クォン・ノシクは、ななみから秘密をうけついでユンを監視するために、ナヒとその母親を利用し、ナヒの母親はクォン・ノシクから金銭的援助を受ける。ナヒが学位を得るまで学業を続けられ、大学の非常勤講師の職につけたのはノシクのおかげである。

ナヒは、ノシクの過去を調べるヨンヒに助力を与え、「他人の罪科をあなたが引き受ける必要はない」とユンを説得するキーパーソンだが、作品終盤でノシクから、現在の堅実な生活と、「異常者」ユンとの愛のどちらを選ぶ

かと迫られ、結局「未来のない」ユンとの愛を捨ててノシクの側についてしまう弱さを持つ。

鶏養里出身のソン・ギョンスクは、村の地主だった両班・ソン家の娘だが、植民地時代に独立運動をした親族がノシクによって密告され、家はノシクのために没落する。朝鮮戦争後に孤児となった彼女は、ノシクが事業のかたわら設立した孤児院に入れられ、そこでノシクに性的虐待まで受ける被害者である。彼女は「(ノシクは)自分の罪科を払うべきだわ。それでこそ世界は公平なのよ」(3巻 p63)とノシクへの復讐を企てる。だが彼女はヨンヒの婚約者だという理由だけで、ノシクとは無関係のウンジュを殺害する。彼女は被害者でありながら、加害者でもある。

そして最後には、孤児院の火事の原因を彼女自身が作ったことも明かされる。当時、彼女が孤児院長ノシクに虐待されていることを知った、村の少年チャンスが義憤にかられ、鎌を持ってノシクを襲おうとするが、チャンスは孤児院の少年たちから「よけいな真似をするな、キョンスクのアマが院長とうまくやってるからこそ、俺たちが楽なんじゃないか」と制止される。桜の木の陰でそれを聞いたキョンスクは傷つき、「みんな嫌い、みんな死んじゃえ」と泣き、幼いユンが、彼女の「願い通り」に孤児院に火をつけたのである。キョンスクが本気で子どもたちの死を願ったわけではないが、彼女に殺意が「一瞬も存在しなかった」わけではない。その一瞬が、たまたまユンによって実現してしまったものだが、我々の心の中に瞬間瞬間起きる罪が孕む重さを作者は示唆する。

ソン家の生き残りで、キョンスクの叔父のソン・ジョンホ老人は、ノシクに復讐する権利を持つ登場人物のひとりである。だが彼は、姪のキョンスクの性的被害を知った時、「身を守れなかったのなら、なぜそのとききれいに死ななかった?」と言い放ち、キョンスクを二重に傷つける人間でもある。そしてノシクが行った罪の古い記憶は曖昧になりながらも、ノシクの生まれの卑しさを最後まで強調する、身分差別主義者である。そしてソン家が「卑しい」ノシクの父親に何をしたのかは全く記憶にない。

「恥辱と貪欲の象徴」（パク・イナ）のノシクであるが、彼もまた被害者である。彼が鶏養里の人々を虐殺し、ソン一族を滅ぼしたのは、かつて身分が低く貧しかったがゆえにソン一族と村人らに惨殺された父親の復讐だったことが語られる。村の最下層身分だったノシクの父親は、ソン家の旦那（キョンスクの祖父）のために、村の寡婦をかどわかす役目をさせられていた。寡婦が被害に遭うたびに、寡婦の親族の村人たちは、両班ソン家には抗議ができないので、代わりにノシクの父親を袋叩きにする。とうとうノシクの父親は不具になり、最後には村人皆から薦に包まれ殴り殺され、少年だったノシクと母親は村を追われる。その時ノシクは、村とソン家への復讐を誓ったのである。ノシクがキョンスクを襲ったのも、彼女がソン家の娘だったことが大きいことが推測される。彼は、祖父の罪を調べ回るヨンヒに対して、「おまえの目にはやつらの鬼神しか見えず、この爺の鬼神は見えなんだか？ あいつらは自分の罪の代価を払っただけだ」（3巻 p133）とつぶやく。

4 過去の結果としての現在

「何も知らず、何もしていないのに」と思っていたヨンヒは、自分の豊かな生活と安定した未来が、クォン・ノシクと宮本という二人の祖父の蛮行の上に成り立っていたことを知る。

作品中、「底知れぬ深い縦穴、そこに昔から人はほかの人を投げ込み、地は悲鳴をあげながらその血を受けた。」（1巻 p202～203、2巻 p14、3巻 p266）と繰り返し現れる表現は、カインとアベルの人類最初の殺人事件後の神の言葉「あなたの弟の血が、その土地からわたしに叫んでいる。（中略）土地は口を開いてあなたの手から、あなたの弟の血を受けた」（創世記4章10、11節）を連想させる。

血を飲み込まされた大地、死体を根元に埋められたまま黙す桜、それを象徴する人物が、ななみであり、ユンである。

ななみは被害者だが、植民地時代の事件を目撃しながらも黙し続け、クォ

ン・ノシクの罪を放置し、彼が財閥会長になるのを傍観したという点では加害者だ。つぎの世代になっても状況は変わらない。人々はユンに近づき、桜の根元に屍体を埋めるようにそれぞれの「罪」のしわよせを押しつける。そして人々は、彼をひとりぼっちにして「戻っていき、すっかり忘れ、未来に歩いていき、明るい世界を生きていく」（3巻 p231.232）。そして森にはユンだけが取り残され、暗闇に座りこんで、人々の代わりに罪の痛みを耐えている。

時にユンは、地中に埋められた被害者の叫びを押さえることに耐えられなくなる。しかし、桜の根元を掘りだそうとしてクォン・ノシクの長男（ななみの夫）に殴られた記憶、ななみの呪縛のことは「おまえもかあさんと約束しておくれ。あの桜の木の精になってくれると。秘密を守ってくれると。ずっと先、ずっと先まで絶対にしゃべらないと。花びらがすべて散り魂たちがみな永遠に消えてしまい、木すらなくなってしまう時まで、かあさんの桜の木の白い精になってくれると」（2巻 p194）によって、ユンは黙し続けた。

ユンが他者の罪を引き受けるのは、彼が唯一、「過去」も「理由」を持たない存在だからである。ユンの父親がどんな人物で、ななみがどうしてユンを産むことになったのかはまったく描写されない。母親ななみですら、「おまえがいつ出来ていつ生まれたのかわたしも知らない」と言って、ユンを捨てかける。ヨンヒは両親の愛憎があったから生まれた。しかしユンには過去も未来もありえず、それゆえに桜の木の役目を負うのである。普通の人間では、他者の罪を引き受けきれない。

作品後半で、それ以上「桜の木」でい続けることに耐えきれなくなったユンは、桜の木の下に罪を捨てて去った人々、すなわち「自分に罪はない、ノシクのせいだ」と言い、犯した罪さえ忘れてしまった人々の目の前に、それぞれの罪を突きつけ、その罪の代価を支払わせ（殺害し）た後、ユン自身も消えて行く。ただユンは、記憶を守る人間としてヨンヒ一人を生き残す。

おわりに

作者はこの作品に日本人読者は想定していなかっただろうが、「何も知らず、何もしていないのに」しかし祖父の世代が奪った財は享受するという主人公ヨンヒは、そのまま日本の若い世代に重なる。過去の罪に関係がない、あるいは国家の行ったことに個人が無関係だとは言えないのである。

現代は過去と切れて、無関係に存在しているのではない。そして人間とは、加害者・被害者に二分できるものではないことを作者は訴える。97年の作品受賞にあたり WHITE 誌の受賞記事は、「金辰氏は、『この森には、クォン・ノシク一家の罪だけがあるのではない。我々の罪も、そこにあるのだ』という点を強調したかったという。「過去の罪があなたに関係ないとはいえない」という作者の歴史観が、この作品を多少難解にした傾向はあるが、ロマンスが主になる少女漫画の型を果敢に打破した点が評価されて受賞に至ったものだ¹⁹⁾と記す。

植民地支配・アジア太平洋戦争終結から半世紀以上が過ぎ、歴史に対する社会的な記憶も薄らぎ、その一方で最近の日本での韓国ブームはドラマ『冬のソナタ』『美しき日々』のヒットなど、とどまるところを知らない。活発な大衆文化交流は好ましいことではあるが、歴史への目配りの無さに危惧を感じる時もある。

ノシクは作品終盤で、過去の事件を知る関係者の皆殺しを計画した。事件を記憶する人々が消えれば、財閥を受け継ぐヨンヒの未来が安定すると考えたからである。ノシクの思考は、戦争・植民地時代の問題に関して、歴史的な時間が流れて被害者が死に絶えれば、現在を生きる人同士で仲良く交流できるという考え方に通じる。日本では、「戦後五十年を過ぎ、当事者の世代はいなくなるのだから『過去のことは一応終わりにしよう』というのが常識ではないか²⁰⁾という発言もしばしば見られる。

だが、たとえ被害者の世代が消えたとしても、人は同じ罪を繰り返す存在である。ウンジュが殺された後、なぜ過去を知りたがるのかとヨンヒはナヒ

に訊かれ、「過去のことは終わったことではなく、今も続いているからだ」と答える。ヨンヒが何も知らずに祖父の財閥を受け継いだ場合、彼もノシクと同じことを行う可能性がある。

人の原罪は、連綿と続く。金辰は、身分制時代、日帝時代、朝鮮戦争、戦後と変わっていく状況の中で、日本人＝悪人・加害者、韓国人＝善人・被害者、というような単純な二分法は用いず、あえて国籍に関係なく人間の持つ罪を描いた。人間とは状況に応じて常に他人の血を流し、その罪を誰かに転嫁し忘却していく存在だと語るなのである。

作品の最後のページは言う。「散る花のように魂は、はらはらと散って行く。誰かが口をつぐみ、傍観しているだけだったことにより、記憶は薄れていく。そして我々は同じやり方でこの世を生きていく。血を飲み込ませた森を持って」（3巻 p270）

（本稿は、2004年5月22日韓国日本近代学会国際学術大会における報告を加筆修正したものである。）

韓国少女漫画『森の名前』（金辰）における人と記憶（佐島）

- 1) 拙稿「韓国少女漫画研究－黄美那『我らは道に迷った小鳥を見た』を中心に－」福岡女学院大学紀要 13号
- 2) 김진 『황무지』 사공사 1999(『荒蕪地』金辰 時空社)。熱帯雨林に閉じこめられたような、戦況が膠着した占領地で、若い軍人になつて基地のそばをうろついた子どもが、軍によってテロリストと疑われて処刑されるというストーリー。テロリストだったのか無実だったのかわからないまま、占領とテロは続いていくという「救いのない」作品で、作者は無意味な殺戮を続けるほかに選択肢を持たない人間の無力さを描いた。
- 3) 김성호 『한국의 만화가 55인』 프레스빌 1996 (キム・ソンホ『韓国の漫画家 55人』プレスビル) pp 276-277
- 4) 김·ヒョン베 (1947-)。SF漫画家。1964年デビュー。1980年読売新聞国際漫画コンテスト入選。代表作『ロボット・テコンV』など。(『한국의 만화가 55인』 pp 153-156)
- 5) 『1815...』 図書出版プリンス初版 1988 全 14 巻。図書出版デファ 1995 再版全 9 巻。
- 6) 『황혼에 지다』 대원문화출판사 1996(『黄昏に散る』大元文化出版社)』全 1 巻
- 7) 『숲의 이름』 대원문화출판사 1996(『森の名前』大元文化出版社)』全 3 巻
- 8) 『바람의 나라』(『風の国』) 1992-。単行本は時空社より 21 巻まで刊行中。
- 9) 박인하 『박인하의 순정만화 맛있게 읽기- 누가 캔디를 모함했나』 살림 2000 (パク・イナ『パクイナの少女漫画の美味しい読み方 誰がキャンディをひっかけたのか』サルリム) p 124
- 10) 楽浪国王は、敵が侵入するとひとりでに鳴って急を告げる「自鳴鼓」があるおかげで国が安泰であった。しかし楽浪を狙う高句麗の大武神王が息子・好童王子に命じて、楽浪の王女に自鳴鼓を切り裂かせ、王子に楽浪を襲わせる。高句麗軍に攻め込まれた楽浪王は、鼓を裂いた王女を殺し、王女を失った好童王子も自殺するという伝説。
- 11) 「コミックテイク」2号 (1997) 掲載作者インタビューによる。パク・イナ、2000、p 129 引用。
- 12)パク・イナ、2000、p 135
- 13) 박인하 「김진와 바람의 나라」 만화평론가협회 『호호에서 아하까지』 교보무고 p 145 (パクイナ「金辰と風の国」、漫画評論家協会『ホホからアハまで』教保文庫 1999)
- 14) 地元・韓国での調査のほか、日本側では滝尾英二氏の調査により明らかにされている。生体実験を推測させる痙攣注射による患者殺害と解剖については、2004年10月24日韓国のマスコミで報道された(世界日報、YTN ニュースほか)。
- 15) 無辜の市民が大量虐殺されたことについて遺族会が結成され、真相究明の運動が行われている。ホームページは <http://haxalgy.jinbo.net/>
- 16) 韓国各地で、証言を集める運動が起きている。黄皙暎の小説『손님』(창작과비평사 2001、『ソンニム』創作と批評社、邦訳『客人』岩波書店 2004) も、一般に米軍による

非戦闘員虐殺と言われている信川（現・北朝鮮）虐殺も、「隣人」による殺戮だったことを取材、小説化したものである。

17) 梶井基次郎『桜の樹の下には』1928（旺文社文庫、1972）

18) 『森の名前』では、桜の木の下に死体を埋めたという表現は、象徴的な意味で用いられている。作品の中で、虐殺の死者は井戸に投げ込まれ、火災の死者は墓地に埋葬されている。

『森の名前』からは離れるが、実際に「桜の木の根元に死体を埋めた」事例としては、戦後福岡県筑紫野市武蔵に置かれた二日市保養所で、引き揚げ中に強姦された女性の墮胎手術が極秘裏に行われ、胎児を「桜の木の根元に埋めた」という証言がある。（毎日新聞2004年5月15日）

19) 「金辰『森の名前』97年韓国出版漫画大賞著作賞受賞」記事『WHITE』1998年1月号。

20) 共同通信・企画記事「靖国参拝を問う」インタビュー <http://news.kyodo.co.jp/kyodonews/2001/yasukuni>